

肉屋の看板

このごろの看板は、ネオンや文字など一応の工夫はあるが、どこことなく平凡。そこへいくと、明治の初めごろは、たとえば「獣肉店」（単なる肉屋ではない）の看板には、紅葉（もみじ）や牡丹（ぼたん）の絵などが描いてあって、紅葉はシカの肉、牡丹はイノシシの肉を売っていることを意味した。というのは、イスラム教徒が戒律によって豚肉をぜったい食べないように、わが国にも明治維新までは仏教のタブーによって獣肉をおおっぴらに口にできない雰囲気があった。が、どこにもルール破りがあるように、気の強い（？）連中は法を犯してこつそりと食べていたから、外国人の往来がひんぱんになった江戸時代の終わりごろには、こうした暗号みたいな看板を掲げて堂々（？）と獣肉を売る店が増えてきた。

紅葉をシカ、牡丹をイノシシにかけたのは花札の絵柄からきたもので、川柳にも、「冬はたん麴町から根分けなり」とあり（『柳多留』）、江戸では冬にも牡丹が咲くという不思議さであった。

ところで、明治になり肉食禁止も解かれて逆に「肉を食え食え」の世になったが、こうなるとただ肉を売るだけでなく、牛鍋屋のように牛肉や馬肉を料理して食べさせる店が現れ、これらの店では看板の文字も牛肉は朱、馬肉は黒の字で、それとはつきり分かるように書くようになった。

その第一号は、横浜の牛肉商で外国の公館などに牛肉を納めていた中川屋嘉兵衛が、慶応三年（一八七六）に江戸の芝・露月町に開いた牛飯店に掲げたもの。その看板には朱色で「御養生肉」と書いてあり、以後、牛肉屋を開く者は、この中川屋の看板にならって朱の文字で書いたと、伝えられている。

中川屋嘉兵衛の店の看板に書かれた「御養生肉」というのは、体に精がつくといった意味で、戦後の一時期わが日本列島を風靡（ふうび）した、「ホルモン焼き」の看板を思い出していただけはそのムードも想像がつこう。いまでも飲み屋横丁の一隅などで見かけることもあるが……。文字を朱にしたのは、牛肉の赤色と、その肉が新鮮なことを訴えるためだったという。

